

やはり俺が麻雀をする
のはまちがっている。

至福のひと時

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒッキーが総武高校じゃなくて清澄に行ってたなら、あの麻雀世界の住人だったら…というお話です

pixivにも載せてます 更新はあまり期待しないでください

目次

| | |
|-------------------------|----|
| やはり俺が麻雀をするのはまちがって る。 | 1 |
| やはり俺が麻雀をするのはまちがって い | 1 |
| る。 | 2 |
| | 18 |

やはり俺が麻雀をするのはまちがっている。 1

(CV：中田譲治)

21世紀、世界の麻雀競技人口は1億人の大台を突破。

日本でも大規模な全国大会が毎年開催され、プロに直結する成績を残すべく高校麻雀部員達が覇を競っていた。

……。これはその頂点を目指す少女達……を支える一人の男の間違ったラブコメの軌跡

――――
〈比企谷side〉

比企谷「マツ缶……飲みてえな……」

春先にしては少々寒い風が体に染み、ふとそんな本音がぼろつと漏れる。だったら買えばいいだろ！とどこかの元コマンドーなら言うのかもしれないがそうはいかない事情がある。

何しろここは魔境、長野だからな。

なぜ魔境かというと、どうやら女子高生の麻雀選手でとびつきり強いのが居るから、と小町が言っていたがよくわからん。女子の話など俺が知るはずがない。俺レベルのプロぼっちになると女子と関わりうものなら、引かれるどころかむしろ気づかれなймаである。プロぼっちは高いステルス性能も身に付けているわけだ…、いや存在感薄いだけだな、うん間違いない。それに……

……それに、もう麻雀は辞めたしな。

千葉から長野への引っ越しについて俺に知らされたのは、高校受験も近い1月頃だった。親父の仕事の都合らしいが、俺に伝えるのは忘れていたらしい。まあ、俺に別れを伝える友達はいないからな、問題ない。いや受験校とかどうするんだよ、公立しか受けられねえじゃねえか、大問題だ。

そこからなんやかんやあつて、結局登下校の楽な住む予定の場所から近い高校に合格した。なんやかんやはなんやかんやだ、それ以上でもそれ以下でもない。

中学の卒業式を終えたらすぐ移住した。亡くなった母方の祖父母の家を譲り受ける形とはいえ変わらず一軒家に住めたのは運が良かった、気兼ねなく家でダラダラできる。

そして、入学式のための登校している今に至る。誰に説明しているかって？気にするな、ぼっち特有の脳内自分語りだ。にしても早く家を出過ぎたな、学校に着いたら読みかけのラノベでも……とぼーっと考えていると向かい側の歩道の犬の首輪が外れた。

……………何か嫌な予感がした。

案の定その犬は道路に飛び出し、車に轢かれそうになる。

??? 「ピリカが……!!」

飼い主らしき人が動き出す前に勝手に身体が動いて……犬を助けようと飛び出した。

??? 「本当にありがとうございます！」

飼い主らしき女子高生が深々と頭を下げる。犬を庇って入院……などにはならず、無傷で犬を助けることはできた。入院するかと思った？それで学校のグループ形成に遅れるかと思った？残念、そんな事関係なしに俺はぼっちになる。これが運命石の扉の選択か。

比企谷 「気にすんな、体が勝手に動いただけだ」

??? 「いえ、気にします。私の大事な家族を助けてもらえたんですから！」

比企谷 「お、おう…、しかしだな……」

真面目な顔で寄るな、近い近い近い。匂いもいい匂いするから。しかも大きい2つのメロンが揺れて……つ。必死に顔を逸らしながら後ろに下がる。

??? 「制服を見るに同じ高校のようですし、今度お礼を学校でさせてください。……迷感でしたら、しませんか……」

飼い主がしよぼんとした表情をする。そんな顔されたら断るに断れないだろ…。

比企谷 「……まあ、別に構わないぞ。特に迷惑な事なんて、ないからな」

??? 「……！ ありがとうございます！ あ、まだ名前を名乗ってませんでしたね。」

私は原村和と言います。あなたのお名前は？」

犬の飼い主は、麻雀の中学大会ことインターミドルの全国チャンピオンだった。

??? 「————きがやくん、比企谷くん、起きてください。」

体を揺さぶられ、机にもたれかかっていた身体を起こし浅い眠りから覚めた。

和 「もうすぐ入学式の時間ですよ？」

前の席に座っている原村からそう声をかけられる。

朝会ったあのインターミドルチャンピオン原村は同じ学年の上に同じクラス、1—2組だった。その上名字が「は」と「ひ」で並んでしまっているので席まで前後になつてしまったわけだ。全国的にもアイドル的な人気を誇る原村と知り合った上に席が前後、普通の男子なら泣いて喜ぶような展開だろうがぼっちの俺には非常に辛い状況だ。む

しろこの状況に勘違いして原村に告白してフられるまでである。フられちゃうのかよ。

目が覚めてきてよく見回すと、原村席の前に居た両側に髪を軽く束ねた小さい女子がじつとこちらを見ていた。おおよそ俺のような目が腐っている男が原村と居るもんだから俺を警戒してる原村の友人…といったところか？

??? 「こいつがのどちゃんの言ってた王子様か！」

和 「優希!? そんな事言つてませんよ!?!」

原村が顔を赤くしながら急いで訂正している。顔が赤くなるほど怒っているのか、まあ相手が俺だから仕方ない。そしてこの原村の友人「優希」と呼ばれていた女は指をぴしつと立てて俺を指差していた。おそらく、朝の出来事を原村から聞いたのだろう。…どうでもいいがこいつの声、典型的なアニメボイスだな…。この声でツンデレでもすれば相当ヒットしそうなものだが。

??? 「その腐った目ののどちゃんの王子様！名前は何だじえ！」

比企谷「腐った目は余計だ……。それと、名前を聞くときは自分から名乗れと教わらなかつたか？」

??? 「ぐぬぬ……腐った目のくせにやり手だじえ……！」

優希とかいう女は拳を握って悔しそうなポーズを取っている。もしかしてこいつアホの子か？もしかなくてもアホの子かもしれない。というか「じえ」って何だ？海女さんから理由あってアイドルになるの？あ○ちゃんなの？じえじえじえなの？いや、声的にツンデレお嬢様アイドルとかしてそうではあるけど。

和「こら、優希？そんな事言ったらダメですよ？それと名前をちゃんと名乗ってください。」

??? 「うっ……わかつたじえ、のどちゃん……」

私は片岡優希！のどちゃんとは中学からの親友で、一緒に麻雀部に入ってたじえ！クラスは——！好きなものはタコス！タコスのことならなんでもおまかせあれ、だじえ

！」

タコスっていうとあれか、メキシコ料理のやつか。しかしなんでタコス？ヤシの実頭に当たったらタコス！っていうためなの？そして、やはりというかこいつも麻雀はするの……。

比企谷「片岡か、俺は比企谷八幡だ。」

優希「……それだけか？」

比企谷「それだけだ、むしろこれ以上必要なことはないだろう？」

優希「いや、ある！ありありありまくりだじえ！例えばそう、タコスは好きかL I K Eか愛しているか？とか！」

比企谷「肯定の意見しかねえじゃねえか、嫌いだったらどうすればいいんだよ……というかタコス食ったこと無いから好きも嫌いもな……」

優希「な、なにー!!??」
タコスを食べたことないじえー!!??」

比企谷「声がでかいうるさい目立つだからやめろポリューム下げろ、むしろタコスを食べる機会って普通は無くないか…?」

優希「むむ……そこまで言うなら今日にでも」

和「優希?そろそろ教室に戻らないと入学式早々遅刻扱いになっちゃいますよ?」

原村が時計をちらと見ながら片岡に急かした。俺が起こされたのもそもそも入学式の時間に近いからだっただしな。

優希「それはまずいいえ!! よし、じゃあ……えつと、名前……思い出した、八幡! 入学式が終わったら私たちと一緒に昼ごはんを食べることを許可するじえ!そこで八幡にもタコスの美味しさを思い知らせてやるじえー! ではのどちゃん、八幡、さらばっ!」

比企谷「おいまだ行くとは言っていないし、名前も……行っちゃった、なんでいきなり名前呼びなんだよ……」

和「優希がすみません……いつもあんな調子なので……ただでさえ朝ご迷惑をかけてしまったのに、また……」

比企谷「いや、原村が謝ることじゃないだろ、気にするな。それに別にあいつと話すのも嫌なわけじゃなかったしな」

和「ありがとうございます、比企谷くん」

原村がにこと笑顔をこちらに向けた。いや何ちよつと可愛すぎませんか？何その笑顔反則じゃないですか？さすが全国でアイドル並みの人気の原村だ、そんな笑顔されたらプロぼっちの俺でも勘違いして（ry

比企谷「しよんなことより、なんで昼にタコスなんだ？ あいちゅは弁当代わりにタコスでも持ってきててるのか？貰うのは申し訳にやいが……」

噛んだ……噛みまくった……、恥ずかしすぎる。原村も笑ってるし……穴がなくても掘って入りたい。

和「ふふっ……す、すみません。えっと、確かに優希は無類のタコス好きなのでお弁当にタコスを持ってきてるといいうのもあります。でも、それとは別の理由があるんです。ここの食堂ではタコスが頼めるんですよ。」

比企谷「…マジで？」

和「マジです。」

マジカー……そんな学校があるんだな、しかも公立なのに……。この分だともしかするとマツ缶とか売店にあるのではないだろうか？流石にないか？……ん、食堂にタコス……？

比企谷「……まさか、片岡がこの学校入ったのは食堂にタコスにあつたから、とかじゃないよな……？」

和「……そのまさかです」

比企谷「Oh……」

まさか食べ物で進学先を選ぶ人がいるとはな……。いや、俺ももしマツ缶があればそれで選んだかもしれない。人のこと言えないな……。

和「えつと…それで、食堂の件はどうしますか？無理にとは言いませんが…私も比企谷くんとお昼ご飯は、食べたいです。」

また笑顔だ。小町に聞いた限りでは原村はテレビ前であまり笑顔を見せない…どちらかと言うとクールなタイプだと言った気がするんだが…そんなことはないのかもしれんな。

比企谷「どちらにせよ、今日は食堂か売店で昼御飯済ませるつもりだったしな……。味も見ておきたいし、まあその言葉に甘えておく。」

和「ありがとうございます。よかつたらその後も一緒にどうですか？ 優希と部活見学周りをする予定なのですが…」

比企谷「あ…誘いは嬉しいが、俺は帰宅部のエースを目指していてだな…」

和「あれ、ここの学校は部活は2年になるまで強制ではありませんか？」

比企谷「なん……だと……!？」

俺の帰宅部の夢が……自宅で悠々とする夢が……素敵なぼっちライフ計画が……
はちまんはめのまえがまっくらになった

結局、俺は麻雀部に入ることになってしまうのだが、それは次の話で。

あ、タコスには普通にうまかったぞ、びっくりした。しかも売店には何故かマツ缶もがあつた。ここは天国か……。

続く？

やはり俺が麻雀をするのはまちがっている。2

前回のあらすじ

俺の夢だった帰宅部エースへの道が閉ざされた

はちまんはめのまえがまっくらになった

だがフェニツ〇スの尾よろしく、まさかのマツ缶で復活！

……違うだろって？ 細かいことはいいんだよ、マツ缶があつたことさえわかればいいんだ。千葉の、いや俺のソウルドリンクがあつたという神からのプレゼントのことさえわかつていればな……。いや流石に気持ち悪いですねごめんさい。

結局、原村と片岡と俺の三人で部活見学回ることになった。案の定嫉妬の目線がグサグサと刺さる。片岡はアレでももう一人が原村だからな、こればかりは避けられないだろう。

だからと言ってそれを回避するために一人で回れるかと言うと……これも遠慮したい。部活だぞ？この俺が一人で部活に入るんだぞ？……いくら考えても成功するヴィジョンが見えない、気づかれぬか気持ち悪がられるかの未来しか見えない。だが、気づかれないとかならバスケットできるんじゃないか？ミステイレクションとかでパスを……無理です誰もパス回してくれませんねわかります。

それを考えると1日くらいなら一緒に回った方がいいだろうというのが俺の結論だ。そこで適当に楽そうな所に入ってしまえばいい。幽霊部員させてもらえる部活ならなおよし。

優希「八幡は何か入りたい部活とかないのかー？」

比企谷「さつきも言っただろう、俺は帰宅部のエースになりたいんだ片おk」

優希「優希！」

比企谷「……ハア、優希。」

名前で呼ばれる事すら抵抗感があるのに女子を名前呼びしななければいけないとはな……。ぼつちには辛いぜ。だが、片岡……優希が強情で譲らないのはさっきの昼食中によくわかったからな……。

優希「それでいいそれでいい、観念するんだじえ八幡！」

比企谷「はいはい……」

和「まったく、優希ったら……」

困ったような口調でも、そう言う原村はどこか楽しそうだ。その前に片……優希を止めて欲しいのだが……まあ、原村が一番わかってるんだろうな、どうもできないと。

優希 「それで！帰宅部は諦めてそれ以外で、だじえ！」

比企谷 「楽な部活、もしくは休める部活、それか幽霊部員させてくれる部活。」

優希 「清々しいくらいにやる気0だじえ!？」

比企谷 「当たり前だろう、勉強と休息の為の時間を何が嬉しくて部活なんぞに使わなければいけないんだ。」

優希 「べ、勉強……。は、八幡って真面目なんだな……。？」

比企谷 「そんな訳あるか、将来の夢の為、今からやっておいた方が楽なだけだ。」

和 「将来の夢ですか……。この時期にはつきりと持っているなんてすごいですね。よければ聞いても大丈夫ですか？」

比企谷「別に構わないぞ。俺の夢は……専業主夫だ。」

優希「せんぎようしゆふ……？」

和「……今、聞き間違いでなければ専業主夫と聞こえたのですが？」

比企谷「原村の耳は正しいぞ、安心しろ。」

和「何故、専業主夫を……？誰か支えたい人でも……？」

比企谷「俺のようなぼつちにそんな相手居るわけないだろう。家から出たくないから、が理由だ。」

和「そんな理由で……そもそもそれでなんで勉強を頑張るんですか……はあ……」

原村が大きく溜息を吐いた。専業主夫に勉強が必要な理由や他に様々に語ろうかと

思ったが、原村の様子を見てやめておいた。……なんかすまん、原村。

優希「せんぎようしゆふつてなんだ？鮮魚を売る主婦か？」

お前はわかつてなかったのかよ……。主夫の字も主婦だし……。やはりアホの子か。

優希と原村は麻雀部に入るのはほぼ決定的ではあるが、他を見ないで決めるのはスツキリしないということで行くつか見回るつもりだったらしい。俺に気を使ってそう言ってる……気がしないでもないが、言っていることもおそらく本心だったのだろう。説明をしつかりと聞いている2人を見ると、そう思えた。

体育会系から文化系までいくつもの部活の説明を見て回ったが、1年の強制入部というシステムがあるせいかなまじ人数が居て、俺の望んだ環境の部活は中々見つからなかった。私立なら案外すぐ見つかったかもしれないが、やはり公立ということもあり部活の設立や維持については厳しいのだろう、ある程度活発さのある部活ばかりだ。

これ以上回っても成果は得られなさそうという優希の提案（飽きただけではないのか）により、俺たちは麻雀部に向うことになった。だが、俺としては麻雀部への入部はなるべく避けたい所だ。……俺は麻雀をやめたのだから。

麻雀部があるという旧校舎に來たが、想像以上に静かで驚いた。どうやら、こちらの校舎には比較的静かな文化系の部活での使用か、倉庫代わりとしての使用しかないらしい（部活紹介パンフレットを読んだ原村談）。環境としては素晴らしいな、ぼっちには快適な空間だ。だからと言って麻雀部に入るわけではないが。

優希「……なのかな？」

比企谷「ここだろうな、あそこのボロボロの看板札にも麻雀部って書いてあるしな」

和「そのようですね……、扉自体は豪華な物ですが……」

原村が言い淀んでるのは無理もない、昔は豪華な作りだったのかもしれないが……一言で言うところ、それに尽きる。看板札も年季が入ってる上に微妙に傾いている。もちろん使えないほど劣化しているわけではないが……どうしても本校舎と比べてしまい、使われていないのではないかと疑念が浮かんでしまう。

比企谷「もしかして、もう廃部にでもなってるんじゃないか……?」

和「部活紹介パンフレットには載っていたので、それは無いと思いますが……」

優希「えーい、めんどくさい!突撃だじえ!」

和「ちよつと、優希!?!」

原村の制止も虚しく空振り、優希は作法など知るかと言わんばかりにノックもせず麻雀部と思わしき部屋のドアを勢いよく開けた。お前は道場破りか何かなのかと問い

質したい。だが、それ以上にこいつと同類と思われたくない。後ろの方に居てやり過ぎそう、それがいい。

ドアの向こうには、自動雀卓を挟んで向かい合っている2人の女子が見えた。1人は眼鏡をかけていて、緑色のウエーブがかかった髪をしている。いや、天然のウエーブか…? もう1人は赤い髪を肩にかかるほど伸ばしている。あれ、こつちの人どこかで見たような……?」

??? 「あら、もしかして入部希望者かしら?」

和 「なんで生徒会長がいらっしやるんですか!」

??? 「生徒会長じゃなくて学生議会議長よ、この学校ではね?」

そうウインクしながら赤髪の女子……学生議会議長は答えた。そうか、入学式で見たから覚えがあったのか。というより俺も忘れるなよ、つい数時間前に見たばかりだろう。まあ入学式はほとんど寝てたから仕方ないね、うん。それにしても変な役職名だな、学生議会議長。初めて聞いたぞ。

学生議会議長「ところで……結局どうなの？あなた達3人は入部希望者？冷やかし？それとも…道場破りかしら？」

和「いい、いいえそんな！入部希望と見学希望です、ごめんなさい！ほら、優希も謝ってください！」

優希「ご、ごめんなさいだじえ……」

ペコペコと謝る原村と優希の様子を見て、くすといたずらが成功した子供のような顔で学生議会議長が笑っていた。あ、この人絶対性格悪い。

学生議会議長「今何か失礼なこと思われた気がするんだけどー？」

比企谷「キノセイデハナイデシヨウカ」

何この人エスパーか何か？さらつと俺の心読まれたんだけど？……そういえば今、原

村が入部希望と見学希望って分けて言ってくれたな。すまんな原村、気遣い感謝する。

??? 「そこらへんにしときんさい、また久の悪い癖が出とるけえ」

学生議会議長「あら、ごめんなさいね？ ん、こほん。麻雀部へようこそ！私は学生議
会長で、この麻雀部の部長の竹井久よ、よろしく！」

??? 「それで、わしが染谷まこで2年じや。家は麻雀カフェしとるから、よかつたら遊
びにきんしゃい」

久「まこの営業も終わったところで…今のところ、麻雀部は私とまこの2人よ。ああ、
驚くのもわかるけど、今はまず自己紹介をお願いしてもいいかしら？」

学生議会議長…もとい竹井先輩は驚く原村達に自己紹介を促していた。驚くのも無理
はない…2人だぞ？ それで部として…そもそも麻雀が成立するのか…?…:…これ
以上は考えない方がいい気がする。よし、触れないでおこう、それがいい。

原村と優希の自己紹介が終わった。名前、麻雀歴、クラス、出身校、あとは好きなも

のとか些細なことを聞かれていた。まあ前半は麻雀部にとつて大事なことだからな。そして俺の番が来たわけだが……

久「でー？その特徴的な目の男の子はどっちの彼氏さんなのかしらー？」

これである。他の見学では担当が男子部長だったため原村が説明すればカタはついていたが……、やはり女子はこういう話題には興味津々ということだろうか？

比企谷「いや、さっきも言いましたけど違いますって」

久「またまたー、入学初日に一緒に部活見学なんてしてるんだからそうなんですよ？恥ずかしがらなくてもいいわよーっ」

比企谷「いえ、本当に。原村と片おく「優希！」…優希と知り合つたのは今日の朝のことですし。」

久「まったまたー……えっ、マジ？」

和「マジです」

原村が俺のことと今日あったことを一通り説明してくれた。先輩方がほーとかへーとか言いながらチラチラ見てくるのが非常に居心地が悪い……。

まこ「ほうほう、今みたいな世の中で漢気のある珍しい男じやのー！」

比企谷「はあ、どうも……。」

久「うん、そうね。確かにすごいわ、誰にもできることじゃない……。でも、考えもなしに動いたのはよくないわね。死んでたかもしれないのよ？」

比企谷「いや、まあ俺は自分が大好きなので自分を何よりも大切にしています。だから大丈夫です。」

久「見ず知らずの犬のために身体が勝手に動いたのに？」

比企谷「そ、それは……」

急にこんなことを指摘されるとは思わなかった。しかも、先生ではなく学生に。俺とすることが不意を突かれて言葉に詰まってしまふ。

久「誰かのために何かできるっていうのは素晴らしいことよ？でもね、それは自分が一番大切っていう前提条件があるからこそ成り立っているものなの。……なんとなく、君はこの事素直に受け取ってくれそうにないけど………どうかこの事を覚えてて？そしていつか理解して頂戴ね？私の学校の生徒が死んじやうなんて嫌よ？」

比企谷「………うす」

それしか言えなかった。このやり方しか思いつかないとか、色々言いたいことはあつた。でもこの人のまつすぐな目をみると、どうしても言えなかった。この言葉を受け取らないと、ガラにもなくそんな気持ちにさせられた。

そして、部室がしんと静まりかえつた。

久「あ、え、えつといきなりお説教なんてしちやつてごめんね？こ、こほん。仕切り直して……原村さんと片岡さんが入部希望、それで話にあつた通りやる気のない比企谷くんが見学希望でいいのよね？」

比企谷「そうですね、とりあえず見学させてもらいます。麻雀はなんか頭使つて楽でないと思うんで、とりあえずは。」

優希「むー？その言い方だとなんか麻雀をわかつてるみたいない言い方だじえ？」

比企谷「まあ、少しなら知ってるからな。でも、お前とかは頭使わずやつてそうだな。直感だけとかで牌を捨てたり。」

優希「なっ！なぜわかつ……ぶ、無礼だじえ八幡！」

比企谷「今のもうほぼ認めてたよな？なぜわかつたって言いかけてたよな？」

和「まあまあ比企谷くん、いくら事実でもさすがにそこらへんにしてあげてください。」

優希「さらつとのどちゃんがひどいじえ!？」

ワーワーガヤガヤ……

まこ「……久しぶりに麻雀部が騒がしくなりそうじゃな、『部長』？」

久「……ええ、そうね。とつても賑やかになりそう」

久「さて、早速打ってみて……って言いたいところだけれど、多分あなた達も今日は疲れてるでしょうから、今日は紹介だけで終えておきましょう?また改めて明日、部活体

験会としやれこむわよー！」

優希「おー！」

和「優希はまだ元気そうですね……………」

こうして部活周りは終わり、門に向かっている。旧校舎は出口が遠いのは少々難点だな…。行き来が面倒そうだ。

和「比企谷くん、今日はピリカを助けてくださって…………部活見学にも付き合ってくださいって、本当にありがとうございます。」

そう言いながら原村が朝のように深々と頭を下げた。気にしなくていいと言ったのに…

比企谷「真面目なんだな、原村は」

和「えっ？」

優希「そうだじえ、のどちゃんは超まじめだじえ！おっぱいはでかいのに！」

和「も、もう優希まで！それに、胸は関係ないでしょう！」

2人が楽しそうに話している。本当に仲がいいんだな、この2人は。この2人の間は虚偽とか、上辺だけとか、そういうのが全くないように見える。

……こいつらは「本物」なのだろうか……？そうだとしたら羨ましくもあり……眩しくもあるな。

全く、何を考えてるのだろうか俺は……らしくもない。もつと気ままにぼつちを決め込んでおけばいいのに。本当にらしくない。慣れない空気で少し歯車が狂ったのかもしれんな。直しておかないとな……

比企谷「俺、こつちだから…」

和「あ、はい、わかりました。比企谷くん、今日はお疲れ様でした。……また明日。」

優希「まった明日、だじえ！」

比企谷「……ああ、『また』な」

このままこの空気を味わっていると『また』がずっと続いてしまいそうな、そんな気がして。俺は歯車を直すために早くこの空気から離れようと、家に向かって自転車を漕ぎ出した。

〈久side〉

家のアルバイトで先にまこが帰った後も、椅子に座ったままずっと考え事を続けていた。

私の夢は団体戦で全国出場……1年の時は私1人で……2年になってまこが入ってくれて……。ちよつと諦めかけたりした時もあったけど、まさか3年になった初日で2人も来てくれるなんて。しかも男子も1人入るかもしれない。待ち続けた甲斐があった……嬉しい、とても。……『悪い待ち』に賭けて良かった。

まあ、説教をしちゃうっていう予想外の事態もあったけれど、てへっ。でも、仕方ないのよ、うん。だって学生議会議長だものね……。……彼も入部してくれると嬉しいんだけどね。

「さって、現実的になってきたならプランも色々考えないとねー」

そう、愚痴を溢した私の声色はいつも以上に上機嫌なものだった。

〈和 side〉

ピリカを寝かしつけて、寝支度を整えてごろつとベッドに寝転がる。今日は色々あり過ぎて、少し頭が追いつくのが大変です。ピリカを助けてくれたあの人……比企谷くん、男の子といきなりこんな一緒に居たのは久しぶりかもしれません。それこそ、あ

の麻雀クラブに居た頃以来……。

ピリカを助けてもらったのにはとても感謝しています。でもだからと言ってそれで急に好きになる、なんて少女マンガみたいなお話ではありません。……私が多少少女趣味なのは認めますが、それでもあるのは感謝だけです。なら、どうして今日はこんなにも居心地が良かったのでしょうか……。今はまだ、わからないのでしょうか。もつと時間をかけて互いを知って仲良くなれば、きっとこの理由もわかるはずですよ……。……。

……よし、悩んでも仕方ないですから、寝る前に日課のネット麻だけでもしておきましょう。

ユーザーネーム、へのどつち〈……つと

続く